

稽古台本 八（最終決定稿）

平成十三年十二月十一日

博多座市民松舞台の月公演

131213（第十七稿）

（玄海美女妖譚）

肥前の西施

松浦佐用姫

作 香月 隆

登場人物

狂言回し（一）

野村万禄

狂言回し（二）

稲石丈志

松浦佐用姫

西崎松枝

大伴狭手彦

藤間喜州

鏡池に住む男

同 右

（大蛇）

照明	幕前	音声・内容	音楽効果
客席地明かり 客席暗転 狂言師に ライト	緞帳上げ 花道より二人の狂言 回し登場	<p>E 明るい海の音 IN\B・G (30秒)</p> <p>1「狂言」 (謡)これは不知火筑紫の国。</p> <p>2「狂言」 (謡)これは不知火筑紫の国。 博多の津より西へ向かう旅衣。</p> <p>3「狂言」 これは諸国一見の旅人にて候。 存ずる仔細あつて、松浦の里に参らばやと存じ候。</p> <p>4「狂言」 (謡)潮風煙る玄界灘の…</p> <p>5「狂言」 (謡)沖つ船の白帆を眺め、棚引く 虹の松原をうちすぎて、肥前の国、</p>	A

侍女 村娘 村娘 村娘 村娘 村娘
一 二 三 四 五 六

狂言回し、花道七三
に立つ

松浦（まつら）の里に着きにけり。
松浦の里に着きにけり。

6「狂言」

急ぎ候ほどに、松浦の里に尽きて候。
いにしえよりあまたのものが松浦の
里より韓（から）へ唐土（もろこし）
へと渡りたる。韓より唐土より渡り
来る。唐（から）へわたる津にてこ
れを唐津と呼びて候。

7「狂言」

いかにも、唐へ渡る津にてこれを唐
津と呼びて候。

8「狂言」

韓の人、唐土の人、肥前の人、とも
に相睦まじく住み安んじて、松浦の
里唐津はまこと泰平の極みにて候。

9「狂言」

まこと泰平の極みにて候。

10「狂言」

（謡）松浦の里の景色すぐれ…

11「狂言」

（謡）後ろは陸（くが）の果てに連
なる鏡山。

12「狂言」

（謡）面（おもて）は遙かの海原に
して…

13「狂言」

（謡）遠くは高島、吉岐、対馬。果
ては韓の国、唐土へと思いを至さん
ばかりなり。

狂言回し、幕前下手
より退場

E 波の音、残って…

<p>第一幕 第一場 (松浦の里)</p>	<p>音楽が入る</p> <p>M1 「童うた風の明るい曲」 (イントロ)(10秒)</p> <p>B</p>	<p>幕上がる</p> <p>和装の女々村娘たち (奈良平安風小袖姿) 登場し、春の舞を演じる</p> <p>明るく盛り上がって 村娘達は上手へ退場 舞台、一瞬空になる 下手より侍女が登場、 佐用姫を探して走り抜ける(上手へ退場)</p> <p>佐用姫が花道から登場、 花いっぱい春を愛でる</p> <p>舞台の雰囲気は松浦の山と海、自然の祝福 4セリ降ろし 佐用姫、上手退場</p> <p>M1 (10)</p> <p>M1 (F・O) (2分6秒)</p> <p>14「テープ」(声直し) 佐用姫さま。(侍女登場) 佐用姫さま。 佐用姫さま。 佐用姫さまあ。</p> <p>M2 春遊び(別曲)</p> <p>C</p> <p>T A P E</p> <p>暗転 下手スポットの中 に狂言回し登場</p> <p>狂言回し4セリより 登場 (1分)</p> <p>15「狂言」 佐用姫は松浦の里の、長者の娘にて候。</p> <p>16「狂言」 美しきこと、三国に敵うものなしと</p>
-----------------------	---	---

<p>狂言回し あたりを伺う</p>	<p>の噂、奈良の都にも立ちのぼりて候。 (くだけて口語調に)さて何と思う、 触れなば落ちんばかりのいい女では なかつたか。 17「狂言」 いい男を見つけてあげたいものじ や。 18「狂言」 (手をかざして)今夜はちといい男 が少ないようじゃが? いや三国一の美女に敵うものはござ るまい。ああ、あわれ佐用姫。 19「狂言」 いやいや、奈良の都より姫に似合う た大伴狭手彦様がおいでなさると のことじゃ。 20「狂言」 (再び文語調)大伴狭手彦、りりし き若武者姿。韓の国へ用向きのため 都より船に乗り松浦の里へ参られて 候。</p>
<p>照明つく</p>	<p>唐津の浦にともづな 結ぶ都の船一艘、照明 で浮かび上がる(紗幕 などで工夫) 狂言回し下手退場 狭手彦上手より登場 狭手彦にとって松浦 の里の何もかにもが珍 しい 村娘たち現れて狭手 彦に関心を示すが狭手 彦の心は別のところへ 大伴狭手彦、舞台の 片隅に板付きになる</p>
<p>M5 「出会い」</p>	<p>M3 「五月の風」 M3 〽F・O(3分11秒) M4 「さすらい人」 M4 〽F・O(3分14秒)</p>
	<p>E D</p>

	<p>狭手彦のうわさにひかれて佐用姫登場</p> <p>狭手彦、佐用姫を見てこれこそ自分の求める永遠の女性だと…</p> <p>狭手彦の求愛に佐用姫は恥じらい…</p> <p>しかし何かにひかれるように相寄り舞を始める二人</p>		F
転調	<p>二人、退場して掛け物を脱ぎ再び登場</p> <p>しばしの愛の暮らしを営む二人</p>	<p>21「狂言」(舞台かけ)</p> <p>狭手彦、佐用姫、二人の恋はかりそめなれど、ことさらにことさらに色めけり。</p>	G
照明、しばしの時の移りを象徴して	<p>二人が手を握るラストのきめでM6・FO</p> <p>はつとあることに気づく狭手彦</p>	<p>M6 〽F・O(3分55秒)</p> <p>E 二人の仲を裂くように風が吹き始める(20秒)</p> <p>22「狂言」(舞台かけ)</p> <p>佐用姫よ、船出の時がやって来た。私は荒波超えて韓の国へ渡らなければならぬ。</p>	H
<p>しかし佐用姫は狭手彦を離したくないのだ</p>	<p>M7「嵐の予感」IN〽B・G</p>		

<p>鏡を佐用姫に渡す狭手彦</p>	<p>23 「狂言」(かげ)(0、18) 佐用姫よ、私の形見をあげよう。ます鏡、名月のごとき銀の鏡を。</p>	I
<p>(0、27) 佐用姫に鏡を残して後る髪を引かれる思いで去っていく狭手彦(花道?)</p>	<p>24 「狂言」(かげ)(0、55) 彦を韓の国へやらせてはならじと思ひ候。</p>	
<p>(0、50) 独り残された佐用姫は、しばらく呆然とするが狂ったように狭手彦を追おうとする</p>	<p>25 「狂言」(舞台かけ) 韓の国にやらせてはならじ。韓の国にやらせてはならじ。</p>	
<p>(1、20) かしなにか大きな力に阻まれて後が追えない、遂に佐用姫は独り残される風、吹き裂かれる佐用姫</p>	<p>E 風、吹き荒れる</p>	
<p>佐用姫、孤独の舞</p>	<p>M7 〽F・O(2分5秒)</p>	
<p>雷光の中、鏡を抱いてさまよう佐用姫</p>	<p>E 風、吹き荒れる(10秒)</p>	I2
<p>雷光のみ 二〜三回 (嵐の予感)</p>	<p>… 「さみしいさみしい」と全身で嘆く佐用姫…</p>	K
<p>松浦の海、怒濤の照明(スモーク) 鏡を抱いて怒濤に身</p>	<p>E 雷鳴(15秒)</p>	

<p>舞台は海 に変わる 激しい雷 光</p>	<p>を投げ溺れ行く佐用姫 (1番セリで降り)</p>	<p>E 海の中、水泡と雷鳴が幻想的 にこだまして(30秒)</p>	<p>L (続)</p>
<p>第一幕 第二場 (松浦の里から呼子へ)</p>	<p>暗転</p>	<p>舞台、暗転 紗幕下り</p>	
	<p>夕日 上下より 登場した 狂言回し にスポット</p>	<p>幕上がり明かりつく 夕日が悲しい 悲しそうに大地に頭 をすりつけて礼拝する 村の人たち(侍女と村 娘、)</p>	<p>M9 「鎮魂の曲」 IN 26 「狂言」(かげ)(9、25) 佐用姫は松浦川に身を投げ虚しくな り給いて候。十尋の水底に妖しく光 りたるは、狭手彦の鏡にて候。</p>
<p>暗転 上下より 登場した 狂言回し にスポット</p>	<p>上、下に狂言回し登 場し、スポットに浮か び上がる</p>	<p>M9 〽F・O(1分55秒位)</p>	
<p>静寂来る</p>		<p>27 「狂言」 佐用姫は虚しくなり給いたるか。 28 「狂言」 いかにも虚しくなり候。</p>	

<p>狂言スポット落ち</p>	<p>狂言はけ</p>	<p>29「狂言」 それは不思議なことじゃ。 30「狂言」 いやいや確かに虚しくなって御座る。 31「狂言」 あれあれ、あれをご覧候らえ。</p>	<p>N(以下 M12ま で続き)</p>
<p>スッポンにスポット</p>	<p>佐用姫がさつき息絶えた姿のままにスッポンのせりから浮かび上がって来る</p>	<p>32「狂言」(かげ)(0、25) 今一度、狭手彦さまの姿みたやと思いは募り、思い出したるは鏡山にて候。不思議や夢か幻か、佐用姫に生氣蘇り、鏡山へと駆けつけ候。</p>	
<p>本舞台照明つく</p>	<p>本舞台照明つく</p>	<p>33「狂言」(舞台かけ) 山より見ゆる沖つ船。あれこそ狭手彦様に御座ろう。</p>	
<p>佐用姫、布を羽織って舞台へ</p>	<p>34「狂言」(舞台かけ) 狭手彦様に御座ろう。狭手彦様に御座ろう。</p>		
<p>山の麓に立つ佐用姫</p>	<p>M10 C・F(1分35秒)</p>		<p>N</p>
<p>山へ登る佐用姫 さらに高く登る佐用</p>	<p>M11 「領布振山の舞」 IN B・G</p>		
<p>姫</p>			

<p>布を解いて小さく振る 布を振る仕草はやがて大きくなって… 山頂に達し必死に布を振る燃え上がる慕情</p>	<p>(0、48～) (1、25～)</p>
<p>佐用姫、山を下り始める</p>	<p>35「狂言」(かげ)(1、30～) 狭手彦さまの行く手ぞ平穩たらん。 佐用姫は山の頂より海鎮め給えとひれを打ち振り打ち振りて候。</p>
<p>舞台九〇度回る(雷光) 領布振山が呼子の岸壁に変化する(4セリ) 呼子へ髪振り乱して馳せる佐用姫</p>	<p>36「狂言」(舞台かげ) 波さかまきて吹き来たる沖つ風に負けじとてちぎれるほどに領布(ひれ)を振りたる鏡山。これよりこの松浦の山を領布振山(ひれふりやま)とぞ呼びにける。</p>
<p>盆、周り始める</p>	<p>M11「恋の狂乱」 M12「恋の狂乱」 IN「B・G」</p>
<p>呼子の岸壁に立つ佐用姫 沖に向かって激情を</p>	<p>37「狂言」(かげ)(0、50～) 何思うや佐用姫は松浦の山を下り降り、東松浦の鄙の道、海へ向かいて走り出す。 38「狂言」(舞台かげ) めざすは狭手彦様の御船が見える場所なるぞ。東松浦の果て岬、呼子に立たば見えなむかし。呼子に立たば見えなむかし。</p>
<p>39「狂言」(舞台かげ)(1、30) 狭手彦様、狭手彦様。</p>	<p>P</p>

		岩に当たる雷光		
		ぶつける佐用姫「適うことなら私もあなたの跡を追いたい！」 舞台また回る（4セリは反転している） 絶望が体内に充滿し心根尽き果てて崩れるように倒れる佐用姫 （3、05）佐用姫岩と化す セリ降り 4・1セリ上がり岩を表現	40「テープ」（オフ オン オフ） 狭手彦さまーっ。狭手彦さまーっ。 狭手彦さまーっ。	T A P E
		岩が不思議な妖気に触れる 照明、嵐を象徴して闇をもたらし 嵐少しおさまると照明に浮かぶ佐用姫 セリの中央へ 復活 佐用姫はまた復活したのだ 幕降りる	M 1 2 A 妖しい声（アー） （佐用姫着替えの間） M 1 3 （せりあがって蘇生する佐用姫）	Q 2 Q 3
	幕 間 （三）四分			
		紗幕（底黒）に照らし出される光のイリュージョン	M 1 3 B 幕間 IN）B・G 42「狂言」（舞台かけ）生） 幕間をお借りして「松浦佐用姫」の	幕間

解説を致しましょう。

佐用姫伝説は日本三大伝説のひとつとされている物語です。

能の世界では、世阿弥の作とされる六百年ほど前の初期の本があります。

伝説では、佐用姫に三つの結末が用意されています。

一つ目は、只今の舞踊でご覧頂きましたように、狭手彦の形見の鏡をいだいて、松浦川（まつうらがわ）に身を投げたというお話です。

二つ目は、やはり只今ご覧頂きましたが、佐用姫は呼子の岸壁から狭手彦を見送ったあと、悲しみのあまり、岩と化して死ぬという結末です。

夫を偲んで石になるという設定は「望夫石伝説」という中国渡来の物語です。佐用姫伝説にも中国渡来の物語の思想が影を落としたのでしよう。

三つ目は、これからお送りする物語です。

狭手彦が韓の国へ去ったあと、佐用姫のもとに男が現れました。

狭手彦にそっくりな男です。

実はこの男、蛇でした。

佐用姫は狭手彦恋しさに、この男と結ばれてしまいます。

拳句、蛇に魅入られて命を奪われま

す。これを、「蛇と結婚する物語」とい

	<p>光のイリュージョン、 豪華絢爛</p>	<p>う意味で、蛇婿入り伝説と呼ん ます。もともと、日本に存在した伝 説で、似たようなお話が各地に伝え られています。</p> <p>(クッション)</p> <p>43「狂言」(舞台かけ) 佐用姫に用意された三つの死に方。 それでは最後の結末「蛇の婿入り」 の展開です。</p>	
<p>春の照明</p>	<p>第一幕 第一場</p>	<p>(佐用姫と男の出会いの空間)</p>	
	<p>幕上がる</p> <p>イントロ12秒の後</p> <p>几帳の前の脇息で休 んでいる佐用姫(ひな 壇)</p> <p>次々に登場する村娘 たち</p> <p>村娘、佐用姫を誘 うが少し半身を起こす だけの佐用姫</p> <p>今度は村娘が佐用 姫を誘う、少し気は動 くのだがやはり憂愁に 沈んでしまうのだ</p> <p>村娘を交えて佐用 姫を慰める踊り、少し は佐用姫の気持ちも和 んでくるが…</p> <p>佐用姫、村娘たちを</p>	<p>M14 「再び戻った村の春」</p> <p>IN→B・G</p>	<p>R</p> <p>(1、40)</p>

夕暮れへ	置いて独りで重く苦しい孤独の舞いを始める	E カラスの声しきり、よせくる不安(3、10)	S
照明、少しずつ夕景へと	おびえて去る三人の娘たち	M 1 4 ｝ F・O(3分30秒位)	
佐用姫、舞台の一角で板付きとなる(フリーズ)		4 4 「狂言」(舞台かけ)	
		狭手彦や韓の国に旅出で立ちて五日とは経ちぬなり。	
		M 1 5 「誘惑」	T
月の夜	狭手彦とそっくりの男セリ4・4から登場	I N ｝ B・G 4 5 「狂言」(舞台かけ)(0、30) 夜更けて佐用姫の褥に来たる男ありてうすら明かりに姿形を確かめるに	
	男、佐用姫に近づき暗示をかけると眠れる	4 6 「狂言」(舞台かけ)(0、50)	
	佐用姫は目を覚ます身をかわしながらも現れた男に心が引かれる佐用姫	もしやそなたは狭手彦様。狭手彦様に候へ…。	
誘惑の色	男、佐用姫に迫る	4 7 「狂言」(舞台かけ)(1、00)	
		これはこの松浦の山の鏡池に住む男にて候。佐用姫殿の色香に恋慕をいたし山駆け下り松浦の川を越え、今宵一夜睦み給えと参らせ候。	
	ついに男の舞にいざなわれてしまう佐用姫		

妖術の輝 き	<p>男の舞いには抗しが たいものがある 佐用姫は魔術にかけ られたように少しずつ 男にたぐられていく</p>	幻の至福	<p>佐用姫、次第に男に 心を許す舞 かりそめの恋ではあ るが嬉しくもある佐用 姫である 舞い高調し抱き合う 二人</p>	暗転	<p>几帳に入る二人 男、夜明けにひるみ 佐用姫を離して去る</p>	薄明から 朝へ	<p>薄明から朝へ 男の後を追おうとす るが踏みとどまって苦 悩の佐用姫</p>
	<p>48「狂言」(舞台かけ) まこと狭手彦さまに生き写し。まこ と狭手彦さまに生き写し…。</p>		<p>49「狂言」(舞台かけ) 男の妖術、佐用姫を弄びて候。</p>		<p>M15 UP↓F・O (3、50で強制絞り込み)</p>		<p>E ニワトリの声(二声) 50「狂言」(舞台かけ) あたかも時を告げる一番鳥の声した り。 51「狂言」(舞台かけ) 怪しや男、夜明けの知らせに打ち震 え、いずれへかと姿消し候。</p>
							<p>M16A「薄明から朝へ」 IN↓B・G</p>

やはり意を決して男
の後を追うと…

佐用姫、男を捜して
花道の七三へ

舞台暗転
几帳とばし

祠の裏から男が現れ
る

喜びの佐用姫、男に
近寄ると男は立ち上が
る、見ると蛇に化して
いた

愕然とおののく佐用
姫

大蛇、きめポーズ

佐用姫を追いつめる

男
逃げ惑う佐用姫

男は体から靈気を発
し妖しく佐用姫にまと
わりつき佐用姫の精気
を吸い取ってしまう

精魂尽き果てた佐用
姫、最後の力を振り絞
って祠の幣を振りかざ
し男に反撃するが…
佐用姫の意外な反撃
に男はたじたじ

E 辺りをうかがう姫、襲う野鷄

M 1 6 A 〽 F・O (2、03)
M 1 6 B 「男の怒り」

F・I 〽 B・G

5 2 「狂言」(かげ)(2、15)
(きめポーズ)見たな、見たな。大
蛇の私を見たものは生かして返すわ
けにはいかぬのじゃ。

Y X

W

しかし男の逆襲を受け、遂には追い詰められ、大蛇の妖術に制される

蛇が姫に噛み付く
佐用姫、倒れて息絶える（5番セリで消えていく）

勝ち誇った男の舞

M 16 C にセグエ（4、36から）
「大蛇の舞」
C・I 〽 B・G

大蛇えんえんと舞いながら、花道に退場

5セリで見台を前にした二人の狂言回し登場

二人、見台の上の本を開く

M 16 C 〽 F・O
（M 16 A から8分半以上）

53 「狂言」
肥前風土記の文に御座候。

54 「狂言」 （狂言謡風）
大伴の狭手彦、船（ふな）ひらきして韓の国に渡る。松浦佐用姫、峰に登りひれを用いて振り払う。佐用姫狭手彦、相い別れ五日を経て、男あり。夜ごとに来りて佐用姫とともに過ごし、暁に至りてたちまち帰る。姿かたちまこと狭手彦に似たり。佐用姫あやしみて男の裾に糸をかけ、あしたに糸を手繰れば山の池に至るなり。水底に眠る大蛇（おろち）あり。佐用姫を見るや懐かしみて命奪う。侍女、驚き悲しみて山を降り里人に佐用姫の死するを伝うなり。

	<p>紗幕、降りる</p>	<p>54 B「狂言」 他ならず万葉集を紐解けば、狭手彦の郎子（いらつこ）、妾（おみな）佐用姫の歌数種伝えて今の世にも吟詠され候。</p>	
<p>第一幕 第二場</p>	<p>（春の海、春爛漫の里の風景）</p>		
<p>照明は新緑の初夏</p>	<p>紗中、ドライアイス 上手・下手より村娘 六人登場 紗の後ろで村の踊りを展開し松浦の里を称える舞である 踊り終わると舞台後ろに着座</p>	<p>M17「平和」 I N } B・G</p>	<p>A A</p>
<p>海の色が舞台を覆って 紗あがる 下手から狂言回し二人登場、舞台をゆっくり一巡する 時は移り変わった</p>		<p>M17 } F・O（2分15秒） E 潮騒 I N } B・G （1分30秒）</p>	<p>A B</p>
		<p>55「狂言」 げに月日は百代の過客とかや、過客とかや。松浦の里の景色は変われども、紫けぶる紺青の海の面は変わらずして、人の心を和みて今もたゆとうなり。 56「狂言」 西施のひそみも麗しき松浦の姫の物</p>	

	<p>場 佐用姫、花道より登 舞台へ来ると侍女が 佐用姫のそばにかし く め 舞台中央にて舞い納 る 佐用姫の舞い、高ま る</p> <p>幕降りる (終わり)</p>	<p>語。人の語りにて今も唐の津に伝われば、あらかなしやまぐわしやと旅人は鏡山やら呼子やら訪ね参らせ候。</p> <p>57「狂言」 うち死にてうち死にて、三度(みたび)死に給うた松浦佐用姫。あるいはまたよみがえっておるのかもしれないのう。</p> <p>58「狂言」 まこと、そうだよのう。</p> <p>59「狂言」 招じてみよう。松浦佐用姫…</p> <p>60「二人」 松浦佐用姫!</p> <p>M18「舞納め」IN\B・G</p> <p>M18 UP\F・O (4分20秒)</p>	<p>A C</p>
--	--	---	----------------

